

代理苦

新型コロナウイルスのパンデミックがすでに三年目に入り、第七波に入るのはないかとしきりに伝えられる。これほどまでに長期のストレスに耐えることは容易ではない。不安障害や強迫観念症などの精神疾患に悩まされる人々が相当の数に及んでいるらしい。

そのうえ、ロシアのウクライナ侵略により民間人を含む多くの人々が殺戮され、信じられない数の住民がポーランドを始め周辺諸国に押し寄せている。正視に耐えない末世の絶望的な映像に、私どもは毎日リアルタイムで接せられている。侵略が始まったのは二月二十四日だから、小稿執筆時点でこの凄惨な戦争はもう一カ月半もつづいていることになる。

左翼リベラリズムの今なお色濃い日本のジャーナリズムや世論、自国の安全保障を米国に委ねるしかない日本人は、ただただ「無事」を祈るしか他に術はない。

この陰鬱な気分から何とかして解放されたい。種田山頭火の句が再び静かなブームになり始めている

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

と、山頭火研究の第一人者からのメールで知った。関連書も確かに動き始めたとも聞かされた。

先月のこのコラムでもちよつと触れたが、山頭火は神経症者である。生涯にわたり酒と放浪に身をまかせ、孤独と寂寥、不安と抑鬱を歌いつづけた自由律句の、尾崎放哉とならぶ異才である。

酒飲めば涙流るゝおろかな秋ぞ

いつまでも死ねないからだの爪を切る

人間のどうしようもない寂しさと深い悲しみを、定型や季題にこだわらず自由に歌ったこれらの句は、なぜか、本当になぜなのか、私どもの苦しみを癒してくれる効用がある。私どもの苦しみを「代償」してくれる効用がある、と言い換えたほうがいいのかもしれない。

凡夫の苦しみを代わって引き受けてくれる菩薩の行のひとつが「代理苦」である。辛く切ない時には辛く切ない文学に出会うことによって、私どもの心は癒される。山頭火、この機会にもう少し読み込んでみようか。